

琉球大学学術リポジトリ

自己受容と他人受容との関係についての実験的研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名城, 嗣明, Nashiro, Shimei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19309

自己受容と他人受容との関係についての 実験的研究^{注1)}

名城 嗣 明

I 序 論

無指示的心理療法の体系はロジャースの19の原理にまとめられているが、(7) その中に、個人が他人を肯定的な態度で受容するか、あるいは否定的、拒絶の態度で受容するかは、その個人が自己をどのような態度で受容するかによつて決まるという意味の原理がある。この原理の説明の中で、ロジャースは「……自己を受容する者は、この自己受容の故に、他人とのよりよい対人関係を持つ。」(7) と述べている。

もしロジャースのこの原理が正しいならば、心理療法において二つの実用的意義が派生する。その一つはクライアントの他人に対する態度を変化させる為のテクニックを暗示することである。即ち自己受容度を増すようにし向けることが、他人受容度を増すことに通ずるという論拠が出来て、そうする為の色々な具体的テクニックを考案する出発点になる。第二に、心理療法の効果について評価する為の理論的基礎をもたらすことである。即ち自己受容度の増大が、治療効果の尺度になる。

このロジャースの原理が正しいかどうかを実験的に検討した最初の報告はシーラー (9) のそれである。この実験では記録されたカウンセリングの事例について、内容を分析し、カウンセリングの進展に伴つて自己受容的内容をもつ応答の数が増し、同時に他人受容的な内容をもつ応答の数も増し、この両者の間にはかなり高い相関が見られることを報告した。

カウンセリングの事例について同様な方法で実験された他の例 (8, 11) でも、やはり自己に対する受容を示す度合と他人を受容する度合との間には高い積極的相関々係が存在するという結論に達している。

これらの一連の研究に続いて、質問紙を用いて被験者の数をふやしたり (6)、あるいは、単に数をふやすばかりでなく年令や背景の異なる色々なグループを包含するなど (1)、実験方法を改めて、同じ仮説にとりくむ研究が現れたが、いずれも自己受容度と他人受容度との間に高い積極的相関々係があることを認めた。しかし間もなくロジャースの原理に疑問を持つ者が次々に出て来た。例えば、自己受容と他人受容との間に高い積極的相関々係があることは認めるが、自己を受容する者は同時に他人をも受容するとしても、そういう個人は必ずしも他人に受容されるとは限らない (3, 4)。あるいは、自己を受容する者は、他人をも受容し、同時に他人からも受容されていると考える傾向があるが、実際に本人が考えているほどに他人から受容されているかどうかは別問題であり (3, 4, 5)、そうなると、ロジャースが述べている「……自己を受容する者はこの自己受容の故に、他人とのよりよい対人関係をもつ。」ということが疑わしくなる (4)。自己受容と他人受容との間に高い積極的相関が存在するという事は必ずしも、自己を受容する者が一人のこらず他人をも受容することを意味するのではなく、高い自己受容度を

注1) この報告はハワイ大学留学中、1961年5月に筆者が行なつた実験結果のまとめである。

示す者の中には低い他人受容度を示す者も居る(3)。自己受容度、他人受容度を測定する為の尺度や、自分が他人に受容されていると思うかどうかをたずねる為の質問紙などが次々に作成され(1, 2, 6, 10), さらに、実際に本人が考えているほどに他人から受容されているかどうかを調べる為にソシオメトリーが併用されるなど(3, 4) 色々な方法が紹介されているが、今日までの研究方法で一致している点は、相関係数によつて変数間の関係を調べていることである。同様な仮説について、新しい尺度を用いて、自己受容度の「高い」、「中間」、「低い」という3つのグループを選び、さらに新しいこゝろみでこの3つのグループ間の他人受容度の平均差及び得点の分布を検定比較することがロジャースの仮説を、上記の相関比較法よりは直接に検証するものと思われる。

実験の目的及び仮説

自己受容度と他人受容度との間に高い積極的相関々係が存在することがこれまでの色々な実験で示されて来たが、この関係を従来の相関係数によらずに、グループ間の平均差及び得点の分布を検定比較によつて調べて見ようというのがこの実験の目的であつた。

この実験では特に、個人の自己受容度が、一時的に接触する集団にも反映するか否かを調べたい。そこで、具体的に次の仮説が立てられた。

「自己受容尺度によつて高い得点を示す者は、低い得点者よりも集団環境を好意的な態度で受容する。」

Ⅱ 方 法

1 被 験 者

被験者は一般教養課程の心理学概論のクラスに学ぶ男女大学生で、総員61名に第一テストを行い、下記の尺度によつて選ばれた自己受容度の高い者、中間のもの、及び低い者、それぞれ10名づつの計30名である。

2 尺 度

第一テストには自己受容—自己拒絶の度を測定する為に作成されたスパイヴァックの尺度(Spivack Response-Form)(10)の縮小版を新たに作り、これを用いた(Appendix I)。

スパイヴァック尺度の原型は66対の計132問から成り、各対は同じ内容の間で、1問は自己受容、他は自己拒絶に関連し、各対は互に隣接しない様に配置されている。この実験では問題数を50に縮めた。25問は自己受容に、他の25問は自己拒絶に関連するものであるが、原型と異なる点は、選ばれた50問がそれぞれ独立した内容を含んでいることである。短縮した事には次の二つの理由がある。

- 1) スパイヴァックは尺度の原型が高い信頼度を持つている事を報告していること。
- 2) 第一テストでは時間的に制限を受けることが予想されていた。

尚尺度の原型は三段階法を用いてあるが、この実験では五段階法にした注2)。

第二テストに用いた尺度は、筆者が新しく作成した質問紙注3)で、集団環境下に於ける

注2) 5段階法の尺度のそれぞれの位置の定義は Phillips (6) のそれになつた。

注3) この質問紙は二部から成り、第一部は3問について五段階法でチェックさせるもの、第二部は6対の形容詞について、グループ討議のメンバーに当てはまるものをチェックさせるものである。

(Appendix II)

他人受容度の測定尺度を将来作成する場合の参考に供する為のものである。

3 実施手続

被験者から正直な応答を得る為に尺度の記入は無記名でさせた。しかし、あとの処理の為に被験者が自分だけにしか分らない記号を書かせた。そして実験者は被験者の個人々々について名前を知る必要が全くないこと、及びこの実験がパーソナリティ研究の為の新しい尺度の作成を目的とすることを強調した。

第一テストを行つて一週間後に第二テストを実施した。第一テストによつて選ばれた特定の30名を引きはなして別室に集めることが、被験者に不安をひきおこさせるおそれもあるし、又あらかじめ選ばれた30名のうち欠席者が出た場合に備えて、第二テストもクラス全員に対して行なつた。第二テストは二つの部分から成る。

- 1) 先ず全員に、任意に3名乃至4名づつのグループを編成させ、「この大学のふんい気について」という題目で10分間グループ討議をさせた。
- 2) 討議を終つてからめいめの席にもどして、前述の質問紙を配り、第一テストに使つためいめの記号と共に記入させた。

Ⅲ 結 果

第一テストの結果は Table 1 に示された通りで、三つのグループの平均得点は相互に1%水準で有意の差を示した。

第一テストに用いた尺度の得点可能範囲は+100から-100までである。この尺度で、自己受容度の高いグループは85から50まで、中間のグループは36から25まで、低いグループは10から-10までのそれぞれの得点のひろがりを示した。平均は「高い」、「中間」、「低い」の三つのグループについてそれぞれ62.3、30.5、2.5である。この三つの平均の相互間の差は夫々1%水準で有意である。

第二テストの結果は Table 2 に示された通りである。三つのグループの第二テストに於ける平均は、自己受容度の「高い」、「中間」、「低い」の順でそれぞれ6.3、3.9、及び4.5である。相互間の差は有意でない。

次に第一テストの結果からそれぞれのグループの得点のひろがり以内

Table 1 第一テストによつて選ばれた自己受容度の異なる三つのグループ

	自己受容度		
	高 い	中 間	低 い
人 数	10	10	10
平 均	62.3*	30.5*	2.5*
標準偏差	11.56	3.01	6.50

*三つのグループ間の差は相互にいずれも1%水準で有意。

Table 2 三つのグループが第二テストによつて示した集団環境下の他人受容度

	自己受容度の高いグループ	自己受容度の中間のグループ	自己受容度の低いグループ
人 数	10	10	10
他人受容度平均	6.3*	3.9*	4.5*
標準偏差	2.10	2.95	2.97

*グループ相互間に有意差がない。

Table 3 第二テストの前半の得点のみを考慮に入れた場合の三つのグループの他人受容度

	自己の受容度の高いグループ	自己受容度の中間のグループ	自己受容度の低いグループ
人数*	15	12	17
他人受容度平均	2.40**	2.08**	1.41**
標準偏差	2.12	2.06	2.03

*第二表の人員をすべて含み、その上に各グループの得点範囲にある者をすべてくり入れた。

**相互間の差は有意でない。

Table 4 三つのグループが示した他人受容得点 (第三表の個人別得点表)

		自己受容度		
		高いグループ	中間のグループ	低いグループ
他人受容得点	他	6	4	6
		6	4	4
		4	4	4
		4	4	3
		4	3	3
		3	3	2
		3	2	1
		2	2	1
		2	2	1
		2	1	1
		1	-2	1
		1	-2	0
		0		0
		-1		0
		-1		0
			0	
			-3	
人員		15	12	17
平均		2.40	2.08	1.41
標準偏差		2.12	2.06	2.03

平均測定値は相互間に有意な差が見られなかった。

次に他人受容度質問紙の後半を妥当性に欠けるものとして除外した結果の測定値を求めたら、隣接したグループ相互間には有意差は見られなかった。しかし質問紙全体について得た結果に比し、前半のみについて得たこの結果においては平均値が自己受容度の高い、中間、低い、の順と大きさの一致を示し、方向がはつきりしている事が見られた。即ちこの実験に於ける仮説を裏づける方向にある。

この実験に於ける弱点の一つは被験者の数が少ないことであるが、それにもまして測定尺度が十分に洗練されていないことが大きな弱点と思われる。尺度の性質、機能などがはつきり検

注4) 前述の、高いグループ (85から50まで)、中間グループ (36から25まで)、低いグループ (10から-10まで)。

注4) にある者全員をぬきとり、これらの人員をそれぞれのグループにくり入れて、改めて第二テストの結果をながめて見た (Table 3)。はじめの各グループ10名づつが、今度は自己受容度の高い者15名、中間の者12名、低い者17名とそれぞれふえた。その平均は、自己受容度の高いグループから順に2.40, 2.08, 1.41であるが、グループ相互間に有意の差は見られなかった。この結果を得るに当つては、第二テストの質問紙の後半を考慮に入れず、前半だけで算定した。後半は6対の計12語の形容詞から成る。完全にチェックすれば6つのチェックが現れることになっているが、被験者間にチェックの数がまちまちで妥当性に欠けるのでこれを考慮しないことにした。その結果第3表では第2表に比べて予測された方向がよりはつきり認められる。

IV 考察及び結論

第一テストによる自己受容度の平均測定値は、高い、中間、低い、の三つのグループ相互間に1%水準の有意差を示した。集団環境に於けるこの三つのグループの他人受容度の平

討されなければ、それを測定器具として用いた実験の結果についても、明確な結論は下せない。

次に従来行なわれた諸実験の結果として得られた相関係数の意味も明確ではない。これらの相関係数は自己受容と他人受容との間に明確な因果関係が存在するかどうかの根拠には必ずしもならない。例えば、この実験に於て分類された三つのグループのそれぞれに、グループ内に相当な他人受容度得点のひろがりがあり、非常に高い自己受容度を示した者が非常に低い他人受容度を示したり、あるいはその逆の現象を示す者などが認められた（第4表参照）。この事が一体何を意味するかは明らかでないが、他人受容度を左右する要因は自己受容度という単一のものだけではなく、ほかにも重要な要因が存在することも考えられる。もしそうだとすれば、ロジャースの原理も修正を必要とすることになる。したがって、さらに一步を進めて、各グループ内に於ける他人受容度の個人差をもたらす要因が何であるかをはつきりさせる必要がある。従来の相関係数によるもの、この実験の方法によるもの、他にも、色々な方法が考えられると思うが、ロジャースの原理がどの程度に正しいかということについて今後色々な研究が着手されることを望む。

V 要 約

これは、自己受容と他人受容の関係についてのロジャースの理論を検討する為に、従来の相関係数を求める方法をとらず、グループ間の平均の差及びグループ内のひろがりを検定比較する方法でこゝろみた実験の報告である。被験者は心理学概論のクラスから選ばれた30名の男女大学生である。これらの被験者はスパイヴァック尺度の改訂版によつて自己受容度の高い、中間、低い、という3つのグループにそれぞれ10名づつが選ばれたのである。

第一テストから一週間後に、これらの被験者に、集団環境に於ける他人受容度を測定する為に実験者によつて作られた質問紙が配られ、応答が求められた。この他人受容度の、三つのグループ相互間の差はいづれも有意ではなかつた。

次にこの質問紙の後半を除外して、前半のみについて結果を求めたら、三グループ間に仮説を裏づける方向がはつきり見られた。即ち他人受容度の平均は、自己受容度の高い、中間、低いグループの順に小さくなつた。

この実験で、各グループ内にそれぞれ他人受容度得点の大きなひろがりが見られた。即ち高い自己受容度を示す者が低い他人受容度を示したり、その逆の場合などの現象である。この事が何を意味するか明瞭ではない。しかし他人受容度に影響を与えるものは、自己受容度という単一の変数だけではなく、他にも重要な要因が存在することが考えられる。もしそうならロジャースの原理も修正を必要とする。それ故に、一体、他人受容度に影響を与える要因は他にどのようなものがあるか、一体各グループ内に於ける分散は何を意味するかということが明らかにされねばならない。

参 考 文 献

1. Berger, E. M. The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *J. abn. soc. Psychol.*, 1952, 47, 778-782.
2. Bills, R. E., Vance, E. L., McLean, O. S. The Index of Adjustment and Values for Self and for Others. *J. consult. Psychol.*, 1951, 15, 257-261.
3. Fey, W. F. Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others: A reevaluation. *J. abn. soc. Psychol.*, 1955, 50, 274-276.
4. McIntyre, C. J. Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others. *J. abn. soc. Psychol.*, 1952, 47, 624-625.
5. Omwake, C. T. The relation between acceptance of self and acceptance of others shown by three personality inventories. *J. consult. Psychol.*, 1954, 18, 443-446.
6. Phillips, E. L. Attitudes toward self and others: A brief questionnaire report. *J. consult. Psychol.*, 1951, 15, 79-81.
7. Rogers, C. *Client-centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin, 1951.
8. Seeman, J. A study of the process of non-directive therapy. *J. consult. Psychol.*, 1949, 13, 157-169.
9. Sheerer, E. T. An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *J. consult. Psychol.*, 1949, 13, 169-175.
10. Spivack, S. H. A study of appraising self-acceptance and self-rejection. *J. genet. Psychol.*, 1956, 88, 183-202.
11. Stock, D. An investigation into the interrelations between the self concept and feelings directed toward other persons and groups. *J. consult. Psychol.*, 1949, 13, 176-180.